

近代に祀られて

— 行政文書（神社関連史料）にただよう時代の雰囲気 —

明治の訪れ、それは、日本が近代という時代に足を踏み入れた「その時！」でした。

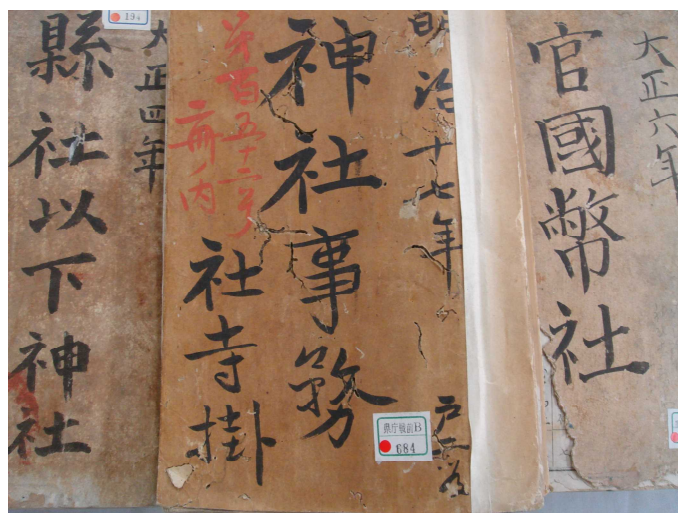
「西洋化」とか「文明開化」に代表される、新しい時代を象徴する突風が吹き荒れたことともあいまって、世の中のしくみから人情に至るまで、何もかもが大きく激しく変化することを求められました。ひとまずは「これまで」をあからさまに強く否定する時代の雰囲気が支配的になりました。

新しいことが歓迎され羨望された一方で、さまざまな変貌への戸惑いも、ひとびとの心のうちを覆いはじめ、それは「来し方」をなつかしむノスタルジックな心情へとつながっていくことになりました。いろいろな偶然が入り混じってもたらされたものであったにせよ、新時代を呼び寄せることになった「事件」や「舞台」、そして「登場人物」への関心が向けられていくことになります。こうして、記念碑・銅像・神社など、慰霊や顕彰に結びつくさまざまなモニュメントがつくりあげられていったのです。

今月の資料小展示では、当館所蔵の重要文化財「山口県行政文書」のうち、神社関連資料に焦点をあてて、「先人の功績を称える」「先人に学ぶ」「面影を慕う」という時代の雰囲気を眺めてみようと思います。具体的には、神社の創建や社格の昇格申請に際して整えられた「由緒書・境内見取図・建築図面・建築仕様書・写真」などを紹介することにします。

なお、人物を追跡する場合には、「神格化」とか「顕彰」という意味合いも色濃く反映されるので、手放しで礼賛するわけにはいかないことは言うまでもありません。先人の事績を冷静に受けとめ没入しないこと、多様性の容認という懐の深さを失わないことは、こうした資料に接するうえでの基本姿勢です。

しかし、混迷の新時代を生き抜くひとびとの心のよすがとして、こうした人物に熱いまなざしが注がれたこともまた事実なのです。



◆まつられた殿様〔野田神社の場合〕

幕末の萩藩主毛利敬親が祀られたのが野田神社（山口市）です。

明治4年（1871）3月、敬親死去。明治6年、防長人民の懇請により、山口野田邸の東隣、七尾山のふところ、豊栄神社（祭神は毛利元就）境内の別殿に祀られ、当初は忠正神社と称されていました。明治9年、野田神社と改称、同時に県社に列格、明治19年、現在地に社殿が造営されました。

このときの神殿等境内建築物の配置計画が「社殿新築指図」〈毛利家文庫58絵図1030（2-2）〉でわかります。境内地の各種建造物の建築仕様書や建築図面も「神社事務 社寺掛 明治17年」〈県庁文書・戦前B684〉に綴じ込まれています。

その後、大正天皇の「即位の礼」がとりおこなわれた大正4年（1915）、国家の忠臣を祭神とした神社として野田神社は別格官幣社に列せられました。展示パネル（右）は内務省に提出された社格昇格申請書に添えられた境内見取図です（「官国弊社 学務課 大正6年」〈県庁文書・戦前B604〉）。名のある絵師の手になるものと思われるこの絵図面からは、明治末年から叫ばれ始めた「長州人による明治維新顕彰」の大きなうねりのなかで強調された「防長精神」を象徴したパワースポットを創りあげようとする意図をもみてとることができます。

毛利家の日常空間は三田尻多々良邸に移されますが、山口には、「亀山の銅像」「七尾山の野田神社」「香山園の毛利家墓所と勅撰銅碑」、敬親の霊にまつわる「聖なるトライアングル」が防長人民の紐帯として築かれたのです。

旧来の秩序を断ち切って、新たな世界観を築き上げようといきまく人材の活躍の舞台を整えたのは、皮肉にも「殿様」という前時代の権威でした。「殿様」によって育まれた小宇宙が、結果的に近代国家を呼び込むビッグバンをもたらしたとも言えるような気がします。

同様の事例として、旧岩国藩の吉香神社、旧徳山藩の祐綏神社に関連する史料を紹介しておきます。

◆まつられた教育家〔松陰神社の場合〕

松陰神社は、教育家・思想家として、新時代を呼び寄せる人材育成をなしとげた吉田松陰を祭神とする神社（萩市）です。その激動の人生から、松陰を見つめるまなざしはさまざまです。明治22年（1889）の贈位を契機として吉田松陰は実兄杉民治邸内に祀られていたのですが、明治40年になって社殿をとともなう県社松陰神社として創建整備されます。

創建申請にあたっては、公爵伊藤博文と子爵野村靖が在京の創立委員として名前を連ねています。地元の信徒惣代として、滝口吉良（明木村）岡十郎（福井村）渡辺蒿蔵（萩町）ら有力者の名前も見えます。このほか、松陰の事績をまとめた「申請理由書」、「境内平面図」、「建築図面」、「境内見取図」（展示パネル左）が綴じこまれています（「県社以下神社 兵事係 明治40年」県庁文書・戦前B621-30）。

右ページ

上左：野田神社神殿写真（「官国弊社 大正6年」〈戦前B604〉）

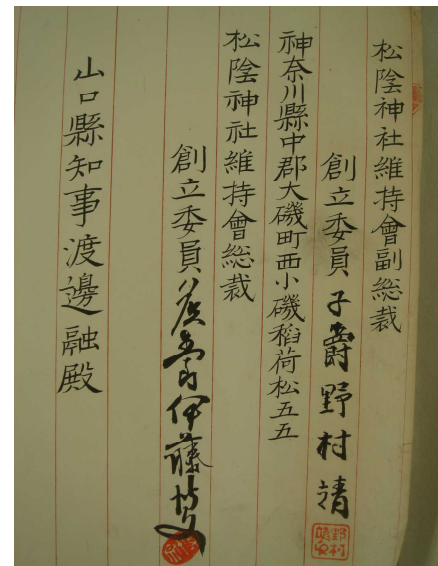
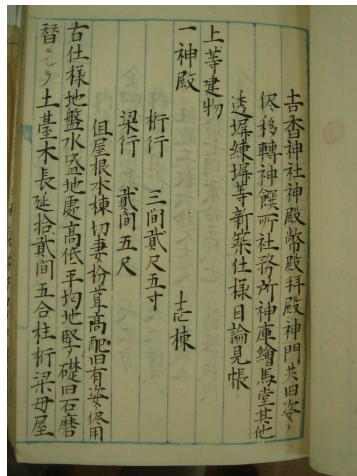
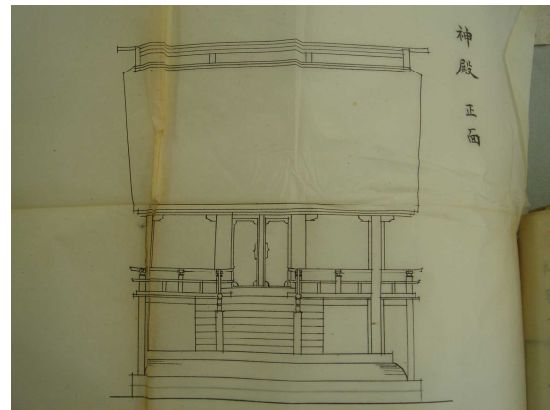
上右：野田神社神殿立面図（「神社事務 明治17年」〈戦前B684〉）

中左：吉香神社移転新築仕様目論見帳（「神社事務」〈戦前B685〉）

中右：祐綏神社全景（「県社以下神社 大正4年」〈戦前A194〉）徳山「写真師林」撮影

下左：松陰神社境内見取図（「県社以下神社 明治40年」〈戦前B621〉）

下右：松陰神社創立願（「県社以下神社 明治40年」〈戦前B621〉）



◆まつられた「明治」〔乃木神社と伊藤神社の場合〕

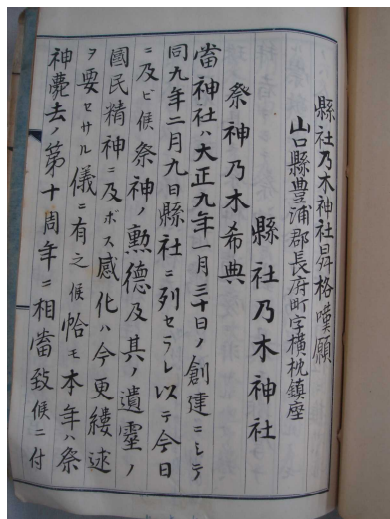
乃木神社は、旧長府藩士で明治を象徴する軍人であった乃木希典を祭神とする神社です。

大正6年（1917）12月に長府（下関市）の乃木希典旧宅隣接地に創建され、大正9年に社殿が竣工します。新聞報道によれば、阿川大工の棟梁松山千代槌が施工にあたり、材木は台湾から運ばれたとされます。大正11年には、乃木希典没後10年を記念して別格官幣社への昇格がはたらきかけられましたが、この申請は内務省から却下されます。このときの申請書類が「県社以下神社 学務兵事課 大正11年」〈県庁文書・戦前B 650〉に綴じ込まれています。展示品は申請に添付された「境内見取図」です。申請には、地元豊浦郡下の町村長、議長・副議長をはじめとする県会議員、さらに衆議院議員までもがその名を連ねています。乃木を祭神とする理由については、「国民精神に及ぼす感化」と記されています。「神社」を介した国民教化や思想統制が意図されたのでした。

熊毛郡東荷村（光市）の伊藤神社創建にも上記の乃木神社と同様のストーリーを読み取ることができます。大正7年、東京大井の伊藤公爵家祠堂から神霊分祀をうけて、伊藤神社は創建されました。明治という新しい時代の出現にかかわり、初代内閣総理大臣として近代国家の枠組構築とその運営に手腕を発揮した伊藤博文が祭神として祀られたのです。熊毛郡教育会特別事業として伊藤公爵遺跡保存会の主唱のもと、伊藤公記念館（山口県指定文化財「旧伊藤博文邸」）の建設とあわせて伊藤神社は創られました。「産湯の井戸」も含め一帯は聖地の様相を呈していました。大正12年、伊藤神社は県社に列格されます。申請書には「明治の功君」「世界の偉人」の記述が見られます。

日清・日露、二つの対外戦争へのかかわりによって、日本は近代国家としての矜持を手にするようになります。こうして明治国家をつくりあげてきた人物を「崇める」動きが加速していきました。殉死、暗殺というセンセーショナルな最期も強く影響していたにはせよ、乃木神社・伊藤神社には明治という時代そのものが祀られたということなのかもしれません。

なお、伊藤神社は昭和34年の伊藤公逝去五十年祭のあとで、東荷神社に合祀されました。



左）「乃木神社別格官幣社昇格嘆願書」（「県社以下神社 大正11年」〈戦前B 650〉）

右）えはがき「伊藤神社と伊藤公記念館」（「県社以下神社 大正12年」〈戦前B 651〉）